

文芸における〈技〉表現をめぐつて

—『判官都話』を起点に—

目黒将史

一、はじめに

義経の兵法取得譚を題材にするお伽草子に『判官都話』がある。^①鬼一が渡唐して手に入れたという兵法の巻物を得るために、義経は一条今出川の鬼一法眼の館を訪ねる。鬼一は兵法を見せることを拒絶するが、義経は鬼一の娘と契りを結び、兵法を書写する。これを知った鬼一は娘婿の「とうかい」を差し向けるが、逆に義経に返り討ちに会う。義経は娘に別れを告げ、奥州へと下り、その後兵法の力で平家を滅ぼす、という物語である。義経を中心に描いているが、鬼一に対する描写も見逃せない。

『判官都話』を彩る表現に「とうかい」の技表現がある。義経との戦いにおいて、「とうかい」は「坂東武者好むもの」として様々な技で義経に斬ってかかる。火花を散らし打ち合い、

「とうかい」の刃は義経の胸元をかすめる。これらの技の名称は『教訓抄』などの楽書に由来する説話や兵法書など、古典や同時期に共有された言説から技の名づけが行なわれる。さまざまな物語と連動して、いわば技の文化が形成されていた様相が垣間見られるのである。同様の技表現は『烏帽子折り』など、他の判官物にも確認できる。

本稿では、義経兵法取得譚を描く『判官都話』を起点に、判官物に描かれる技表現を分析し、現代にもつながる技の文化史を追っていく。

二、『判官都話』テキストをめぐつて

まず『判官都話』のテキストについて確認しておきたい。『判官都話』伝本において、刊行年次のはっきりしている寛文十年

(一六七〇) 刊本(以下、寛文版)が基点になることは間違いない。⁽²⁾物語の梗概については、はじめに記した通りで、いわゆる義経兵法取得譚のパターンを描くお伽草子であり、義経が兵法を求めて、鬼一のもとを訪れ、その姫と契り、兵法を盗み出す。『義経記』巻二「義経鬼一法眼が所へ御出のこと」とも大きく関係している。後述するが、『判官都話』は明らかに『義経記』を披見し、パロディとしての性格もある。ただし、どの『義経記』テキストを披見したかは判然としない。

伝本について、過去義経の会として報告したことがある。⁽³⁾その後、國學院大學図書館に絵巻一軸が収蔵されたことを確認している。伝本間には位相がある。「東京大学国文学研究室(東大一冊本)」、高野辰之旧蔵の絵入本は、これまで零本とされてきた。鬼一との対面場面が大幅に削られ、姫との恋愛譚を中心に構成されている。義経が姫を垣間見する場面が新たに付け加えられ、恋の始まりを花園山での垣間見としている。また、二人の恋愛に直接関係しない登場人物が削られている。義経像により色濃い貴族的優雅さが加えられ、感情豊かで、それを顕わにする人物として描かれる。二人が契りを結ぶまでの過程で、歌のやりとりが多くみられるという特徴がある。義経と姫との恋愛譚を王朝物語のように描き、より中心に据えようとしていた可能性がある。兵法取得譚から義経と姫との恋愛譚へと展開した伝本であることが想定し得る。

また、過日、海の見える杜美術館所蔵の絵巻(二軸)を調査

する機会を得た。この絵巻は、詞書が浅井了意筆とされるものだが、寛文十年(一六七〇)刊本と比較すると、姫君との管弦のやり取りなどの恋愛譚や「張良」説話などが大幅に削られており、東大一冊本とは逆に義経兵法取得譚をクローズアップした伝本であると言える。つまり、これまで東大一冊本や海の見える杜美術館本を含めて諸本として一列に並べられてきたが、改めて伝本ごとの精査が行う必要があるのだ。さらに言ってしまえば、東大一冊本は零本ではなく、義経と姫との恋愛譚までを描く(そこで物語は完結する)系統の伝本と言うことも出来るのではないだろうか。残念ながら、ここでは指摘に留めざるを得ず、今後さらに分析を深め、後稿に期すことにしたい。

三、語り物としての『判官都話』——喜劇として

『判官都話』を読むときに注目されるのが「動き」、動作の叙述である。一例を確認してみよう。巻四、義経は鬼一の館に住み込み、姫のもとへ通い管弦に耽る。鬼一は、その音を聞き、始めはすばらしい音色だと聞き惚れるが、やがてその音が姫の部屋の方から聞こえてくることに気づく、そこで姫のもとに男が通っているのだと悟り、例え摂政や閑白などの公達であっても、鬼一に断りなく姫のもとへ通うことに腹を立て、乳母を呼び出そうと夜明けを待つ。

鬼一、漸うありて、「今は何時ぞ」、「未だ宵にて候」、「ややありて、「今は何時ぞ」、「夜中ばかりにて候うらん」、「ま

だ夜は明けざるか」「未だ深く待つ」と申せば、その時鬼一、腹を立て、「古の十年ばかりが世を取り重ねて、今宵一夜になしたるか。明け煩う」とて、腹を立て、寅の点にもなりぬれば、「更級召せ」とて召されける。更級、恐ろしく思いけれども、法眼の御前に参りけり。

朝を待つのも律儀だが、ここに描かれる鬼一の造型は、かなりコミカルである。寛文版は、鬼一法眼の物語としての性格を持ち合わせる。途中、義経の存在など掻き消されてしまい、鬼一が主人公とも言うべき構成になっている。この物語における鬼一は大変感情豊かに描かれる。鬼一は、「今は何時ぞ」「今は何時ぞ」「未だ深く待つ」と自問自答を繰り返す。ここで注目すべきは鬼一の「動き」、動作の叙述である。まるで喜劇が目の前で繰り広げられているような表現になっているのだ。

朝になると、鬼一は、烈火の如く怒り、女房「更級」を呼び立て、今まさに敵に出会ったかのように、刀を持ち、拳を握り、更級を尋問する。更級は、義経が「花園山」で笛を吹いているのだと話すと、鬼一は、花園山ではなく、姫の部屋から聞こえてくると言い返す。更級は機転を利かせ、様子を探るふりをして、その場を離れる。鬼一は、「あまりに腹を立て、板をどうどうと踏みならし、哀れげに」と、怒り狂い、地団駄を踏んで悔しがると、忽ちに気を落とす、娘を持つ父親の立場を嘆く。

地団駄を踏み表現も動作を描いた表現だが、これは『義経記』のパロディであると考えられる。『義経記』巻二「義経鬼一法

眼が所へ御出のこと」では、鬼一が義経の前に登場する様子を、「生絹の直垂に緋威の腹巻著て、金剛履いて、頭巾耳の際まで引つこうで、大手鉾杖に突きて、縁とう／＼と踏みならし」と描く。『義経記』における、どんどんと荒々しく（大威張りで）歩いてくる様子を、悔しがり地団駄踏み表現として借りてきたのである。ここでも、やはり動作が注目されよう。

その後、鬼一は再び怒り出す。感情豊かというべきか、情緒不安定というべきか、本作の鬼一は、ころころと感情を変化させる。怒った鬼一は姫の部屋へ乗り込まんとするも、北の方や女房が袖にすがりつき、それを止める。すると再び、「子を思う道ほど哀れさ」と、無念ながら討ち入りを諦めるのである。一連のくだりは、まさに喜劇、コメディである。

四、語り物としての『判官都話』——活劇として

もう一例確認してみる。先の例が喜劇だったのに対して、次は活劇である。巻五、鬼一は弟子の「とうかい」に義経殺害を依頼し、義経を石山におびき出し「とうかい」と戦わせようとする。『義経記』巻三では、名を「たんかい坊」、戦う場所を五条天神とするが、物語展開はほぼ同じである。義経は先んじて石山で「とうかい」を待ち伏せる。石山に向かう義経の様子は、「御曹司の御歳十九、伴う者は一人も無し。頼み給ふ物としては、二尺七寸の御佩かせに、猛き心を先として」と、まるで時代劇のナレーションのような描かれ方となっている。『判官都話』

の大きな特徴と言える表現である。そして、義経は門の前の杉の木に飛び上り「霧隠れの法」を用いて姿を消す。そこに「とうかい」が現れる。

やや遙かにして、とうかい、ここに来たりける。とうかいと申は、丈七尺に及ぶほどの大法師なり。色の黒さは、新の漆の如くなり。我も黒しやと思ひけん、同じ色の装束、褐の直垂に、黒糸緘の腹巻を、草摺長にぎつくと着、印地かみを使い、七つ八つに巻き立てけり。四尺二寸の太刀を持ち、柄も四尺、身も四尺、反りに反つたる長刀の鞘外し馬手に引つ提げ、黄楊の棒を八尺五寸にして、八角の面に鉄延べ渡し、世に打ちよげに拵えて弓手に引つ提げ、檜足駄に藍革の緒を入れてぞ履いたりける。若き法師七、八人に腹巻着せて、長刀の鞘外し、弓手馬手に走り散らし、木の葉を靡け、草木を散らして出で来たり。客神の渡り神も如何でこれには勝るべし。

「とうかい」の装束や造型は『義経記』を基本にするが、叙述はかなり異なっている。ここでの造型は弁慶に通ずるものがあり、漆のように色が黒い。また、「柄も四尺、身も四尺、反りに反つたる長刀」など、想像だにしない武器を携えていることも大きな特徴と言える。この「とうかい」が部下の若法師を引き連れ、石山にやってくる。その表現がおもしろく、「木の葉を靡け、草木を散らして」とされる。常識的に考えると、靡くのは草木で、散らすのが木の葉に思えるが、やはり、ここでも

「動き」の描写が特徴的で、疾走感のある叙述は、まさに活劇である。

姿を消した義経は一度「とうかい」を見逃す。この展開は『義経記』と同様である。この後「とうかい」は義経の足下を過ぎ、石山の正面に礼拝すると、義経の姿を探す。しかし、義経を発見できない「とうかい」は、さては入れ違ったかと立ち去ろうとする。すると義経は、ここだとばかりに「とうかい」へ斬りかかる。

御曹司、「今は現ればや」と思し召し、「今出川の小冠者、ここにあり。とうかい、曲者にてあり」と宣ひて、御曹司、飛び違え、宙にて佩刀引ん抜き、長刀にからりと合はせ、「ようは斬られた、この法師」とて、打ち笑ひ給へば、とうかい、「斬り損じぬる」と思ひ、また斬り結ぶ。

義経が「とうかい」を評する「曲者」は、一癖ある者という意味だが、武芸を披露する僧兵などを表すキーワードである。義経は空中で刀を抜き、「とうかい」に飛んで斬りかかる。「とうかい」はそれに気づき、長刀で応戦する。すると義経は、「ようは斬られた」と笑うのである。ここでの「斬られた」は、斬り合わせたことだけを意味するのかもしれないが、頬から血の一筋も流れ出ているのかもしれない。義経の不敵な笑みと合わせつつ、現代の時代劇などでもよく描かれるような好敵手との手合わせがここには描かれている。現代でも好んで作り出される戦いの描写の源流がここにあるのである。また、アクロバ

ティックな戦いの叙述も見逃せない。やはりこの作品を読むときには「動き」の表現が重要になってくる。

ここでは指摘に留めざるを得ないが、一連の「動き」の描写を鑑みると、『判官都話』は本来動きのある浄瑠璃や幸若のよきな作品だったのではないのだろうか。ただし、『義経記』を参照していたと考える場合、どの『義経記』伝本を管見に入れ、演劇的な要素を組み込んだ後、寛文十年（一六七〇）に刊行できるのかなど、さらに考えるべき問題は残されており、今後追求していかなければならない課題である。

五、判官物の〈技〉表現をめぐって

ここまで『判官都話』の喜劇的、活劇的な場面の例を見てきた。先にみた義経と「とうかい」の戦いには続きがある。そこで「とうかい」は様々な〈技〉を繰り出す。ここからは『判官都話』から、判官物における〈技〉表現をみていきたい。

まずは先の物語の続きを追ってみよう。義経は「とうかい」に飛びかかり、「とうかい」はそれに斬り合わせる。その後、若僧たちが一斉にかかるものの義経はものともしない。義経は「とうかい」に戦うように挑発すると、一騎打ちが始まる。「とうかい」は始め、右手に持った長刀のみで応戦するものの、それでは適わないと左手に持った棒も使い、両手で透きなく難き⁹回る。

棒をば手元へ斬りつけられ、履きたる太刀を引ん抜き、太

刀と長刀と二つものにて渡り合ふ。坂東武者好むもの、難き斬り、振り斬り、拝み斬り、後ろへ返りて五刀、前へ返りて七刀、ほうの四つ立て、雷斬り、瀬田の橋本、宇治の川瀬の水車、蜻蛉返しに忍び入り、日を返す八百里、還城寨の通ひ斬り、鬼搦め、こはんぼうが飛び返り、小笹が上に降る白雪、雀の身躍り、大事の八十八手を尽くし、打ちものに火を散らし、御曹司の胸のあたりに閃めかいたり。御曹司、二つものにあしらい給ふ。とうかいが首の周り、危なくこそは見へたりけり。若僧八人、これを見て、「多くの軍を見つれども、これ程おもしろき軍なし」とて、見物してこそ立ちたりける。

「とうかい」は棒を斬り落とされると、今度は太刀を抜いて、義経と渡り合う。そこで、「坂東武者好むもの」として、様々な〈技〉を繰り広げるのである。各〈技〉の詳細は後述するが、ここでの表現は技揃えになっている。問題は「坂東武者」である。結論から言うと、どのように解釈してよいのか不明である。「とうかい」は坂東武者ではないので、義経を指すのだろうか。¹⁰しかし、斬り合って、義経の胸をかすめるので、「とうかい」の技と見るのが妥当だろう。「坂東武者」の性質を物語る表現なのか、それを何故「とうかい」が述べるのかなど疑問が多い。また、若僧達が戦いの聴衆になっていることが着目される。佐伯真一は、延慶本『平家物語』橋合戦を手がかりに、「合戦が曲技・芸能として語られ得る」ことを指摘し、『源平盛衰記』

に「水車ヲ廻シ」のような、「戦闘ではなく、舞と結びついた芸術的なパフォーマンス」の表現が用いられているとする⁽¹⁾。実際に延慶本『平家物語』を確認してみると、「無礼に候ふ」とて、一来法師、兎ばねにぞ越えたりける。是をみて敵も御方も、「はねたりはねたり、能くこえたり」とぞほめたりける」と、浄妙房明俊の頭の上を、兎のように飛び跳ねた一来法師を見て、敵も味方も喝采する。戦いが芸術化されて描かれる伝統的な表現と言えるだろう。

では、ここから具体的にいくつかの〈技〉の表現について見ていきたい。由来の分からないものも多く、また紙幅の都合もあり、抜粋になることをご容赦いただきたい。

① 雷斬り

まず、注目したいのは「雷斬り」である。この〈技〉を始めに持ってきたのは、現代の漫画などにも通じる、いわば〈技〉の文化史の象徴的な表現と考えたからである。幸若舞曲『烏帽子折』に次のような叙述がある⁽²⁾。

源御覧じて「彼奴は曲者かな。斬らばや」と思召。走りかゝつて、雷切と名付て、ちやうど切つて御覧すれば、無残やな、太郎はあへなく首を打ち落されて、首は内へ転びければ、胴は外へぞ倒れたる。

忍び込んできた「熊坂の太郎」に対して義経は、奴は「曲者」である、斬つてやろうと、「雷切と名付て」、斬つてかかり、太

郎の首と胴体は二つに分かれることになる。おもしろいのは「名付」けていることである。現代における戦いを描く漫画など、ほとんどそうであると思うが、〈技〉の名前を叫びつつ、〈技〉を繰り出す。はつきり言つて、これは戦いにおいては無駄な行動である。しかし、この表現は先に見た延慶本『平家物語』にもつながるものなのではなからうか。つまり、一種の芸術化した戦いの表現なのである。技の名称を「名付」け、披露する行為は実は古く、中世の語り物文芸にすでにあったということなのだ。当然芸能、文化としてはさらに遡るものである。

問題は「雷切」がどのような〈技〉なのかだが、はつきり言つてよく判らない。新大系注（麻原美子）によれば、「電光がひらめくように一瞬のうちに切ること」とするが、抽象的な解釈である。後述する「水車」「蜻蛉返り」などの技能的表現と重ね合わせれば、いかに早く振り切るかという〈技〉なのだろうか。先に「曲者」は、武芸を披露する僧兵などを表すキーワードであると述べた。ここで太郎は「曲者」とされるが、〈技〉を披露するのは義経である。謡曲『烏帽子折』には、先の幸若に見えた〈技〉の表現はないが、熊坂長範との戦いの描写に〈技〉が見える⁽³⁾。

熊坂も大太刀使ひの、曲者なれば、早足を使つて十方斬り、八方払ひや腰車、破圪の返し風捲り、剣降らしや獅子の齒噛み、紅葉重ね花重ね、三つ頭より火を出だして、鎬を削つて戦ひしが、秘術を尽くす大太刀も、おん曹司の小太刀

に斬り立てられ、受け太刀になつてぞ見えたりける。

やはり、長範も「曲者」とされ、義経に対して〈技〉を繰り出す。しかし、義経は小太刀であしらい、形勢は不利になる。一種の物語パターンである。義経が〈技〉を繰り出すという幸若舞曲『烏帽子折』の語りは珍しいと言えるのではないだろうか。ここでは先に確認した、早さを物語る「雷切」という〈技〉が義経の俊敏なイメージに重ね合わされた結果であろうと考えられる。

② 瀬田の橋本、宇治の川瀬の水車

「水車」については、先にあげた佐伯論文においてすでに検討されているとおり、覚一本『平家物語』に、「くもで、かくなは、十文字、とんばうがへり、水車、八方すかさずきつたりけり」とみえ、『石山寺縁起絵巻』巻二に悪僧が長刀を廻す様子が描かれている。先行論でふれられていないもので注目されるのは、兵法書の類であろう。『兵法秘術一卷書』「長刀并矛受自在に仕成事」には、「凡そ、長刀に七の手はんべり。一に申手、二に水車、三に受手、四に乗手、五に解手、六に鉢破手、七に長短手々々」とある。また、別注に、「水車手」として、

此ノ手ハ、長刀ノ目拔涯ヲ二束ニ取テ、タスキ懸ニ左右脇ニテ振テ廻ベシ。当物必ズ破ザルト云コト莫シ。長刀ノ血ノ付テ廻ルニ随テ滴血ガ水車ノ水ヲ散似リ。故ニ、水車ノ手ト謂。

とある。ここで説明される様子は、『石山寺縁起絵巻』に描かれているようなものではない。「目拔涯ヲ二束」に持つのだから刃からそう遠くない部分を持つのだろう。「タスキ懸ニ左右脇ニテ振テ廻」すのは、八文字に廻すイメージだろうか。するとそれにあたるものは切り刻まれ血にまみれ、血しぶきが水車の飛ばす水に似ているので、「水車ノ手」というというのだ。現実性があるかはともかくとして、なかなか恐ろしい説明である。『兵法秘術一卷書』は中世に広く流布したことが知られており、判官物の展開と兵法書の流布とが同時並行的に享受され、〈技〉の表現を共有していく可能性が指摘できる。また、善通寺蔵『兵法秘術巻』には兵法の血脈として、鬼一から義経への伝授が記されており、このような兵法書群が、義経の兵法書伝授の系譜物語を形成する一助にはなり得たはずである。

『判官都話』の表現として注目すべきは、瀬田と宇治とが並び表現されていることだろう。当然、瀬田の唐橋と宇治橋の連想である。「瀬田の橋本」は現在、大津市瀬田橋本町として地名が残っている。「宇治の川瀬の水車」は、『徒然草』第五十一段に有名な話がある。後嵯峨院が亀山殿を造営したおり、大井川から水を引こうと、大井の人々に命じて水車を作らせたが、まったく動かず、宇治の里人に命じたところ、すばらしいものができたがった。宇治には急流の宇治川が流れており、水車が多かったため、宇治の里人は水車の造営に達者であったという話である。また、和歌にも詠まれ、絵画の題材としてもよく知

られている。⁽²⁰⁾ いわば、古典、故事をもとにした技の名称が採用されたものと言える。〈技〉の名付けに、さまざまな物語が享受された文化が反映しているとも言い換えられるだろう。

③ 蜻蛉返しに忍び入り、日を返す八百里、還城楽の通ひ斬り「蜻蛉返し」については、先に引用した『平家』にも見え、アクロバティックな動作を想像させる。また刀の〈技〉として、『兵法秘術一卷書』「合戦の時、剣性を感得する事」にも見え、その別注「蜻蛉反」に、「此手、蜻蛉飛遊如キ也。前後左右上下進退定サル也。喩ヘバ、敵ヲネラヒ偽テ在ザル手ヲ替ヘテ、透キ間ヲネラフ。コレ思ベシ」とある。くるんと一回転するの
かと思いきや前後左右に飛んで回る〈技〉とする。

さて、ここで注目すべきは、これら三つの表現は『教訓抄』に見えるということである。⁽²¹⁾ 卷一「羅陵王」に、

乱序一帖。コノ内、各別名アリ。日搔返手。梶飛手。青

蜻返手。角走手。遊返手。大膝巻。小膝巻。囀。三度。昔

七度アリケレドモ、今世ニハモチキズ。三度囀手舞事、狛
光時之流外、他舞人コレを知ラズ。

と舞の手としてあげられているのである。また、「還城楽」は曲名であり、巻四にその由来が語られている。『教訓抄』は、狛近真（一一七七一・一二四二）による、古来の楽曲、楽器の由来や奏法を集めた楽書である。国文学研究資料館、日本古典籍総合目録データベースによれば、『教訓抄』は江戸期の写本は

確認できるが、版本での享受は確認できない。いったいどのようにして『判官都話』の〈技〉表現になり得たのだろうか。

「日を返す」は、もともと『淮南子』六「覽冥訓」にみえる魯陽公の古事に由来するものである。早く島津久基が、『河海抄』などにその表現が引用され、『高倉院嚴島御幸記』にもみえることを指摘しており、さらに麻原美子が『源氏物語』古注釈にみえること、幸若舞曲『入鹿』など舞曲の挿入説話との関係性について指摘している。⁽²²⁾ また、中原香苗が、『還城楽物語』などを還城楽説話と規定し、楽書や幸若舞曲の挿入物語についてまとめている。⁽²³⁾ 先論の指摘するように、楽書にまつわる物語が中世において広く享受されている。これら楽書をめぐる説話の叙述が語り物にも影響をあたえていることに何ら問題がなく、楽書に見える表現が義経物の〈技〉として使われているわけである。舞の動きと連動し、武芸として表現されたということだろう。⁽²⁴⁾

以上、雑駁ではあるが、簡単に〈技〉表現について分析してみた。重要なのは、『判官都話』と同時代に享受されていた物語や古典から技の名づけが行われていることである。つまり、〈技〉表現の分析を通して、判官物とそのほかの物語との関連性、諸相が浮き彫りになってくるということだ。今後さらには追求していきたい。

六、八艘飛び小考―必殺技の文化史―

最後に、〈技〉表現を考えるなかで、〈必殺技〉について考察して末尾としたい。現代において漫画、アニメ、特撮など多用に使用される語彙ではあるが、『日本国語大辞典』には「必殺」の項目はあるが、「必殺技」の項目はない。果たして、〈必殺技〉とは何なのだろうか、またこれまで現代にもつながる〈技〉の表現は、中世の語り物文芸に遡ることを指摘してきたが、〈必殺技〉はどうなのだろうか。

〈必殺技〉を探る上で、注目したいのが「八艘飛び」である。義経の「八艘飛び」について考えようとしたときに、先行研究の少なさに気づく。また、『日本国語大辞典』を始め各種辞典に立項もない。しかし、誰もが知っている、まさに今も生きている義経伝説なのである。はたして「八艘飛び」は、八艘の舟を飛び越える大跳躍なのか、はたまた次から次へと舟を飛び越えていく連続飛びなのか、そのあたりもよく分からないのだ。では、まず『平家物語』からその様子を確認してみよう。覚一本『平家物語』卷十一「能登殿最期」には次のようにある。

されどもいかがしたりけむ、判官の舟に乗りあしたつて、あはやと目をかけてとんでかかるに、判官かなはじとや思はれけん、長刀脇にかいはさみ、みかたの舟の二丈ばかりのいたりけるに、ゆらりととび乗り給ひぬ。能登殿は、はやわざやおとられたりけん、やがてつづいてもとび給はず。

ここに八艘飛びという言葉はない。義経だけでなく教経も数艘の舟を行き来している。教経と義経とが行き当たったとき、一艘の舟から一艘の舟への二丈（六メートル）に及ぶ大跳躍を行うのである。距離は違えど、諸本ほぼ同様の叙述である。

東洋文庫『義経記』の解説に指摘があるが、「八艘飛び」の初見は、『那須与市西海硯』第五「八島合戦」である。²⁹『那須与市西海硯』は、享保十九年（一七三四）、大坂豊竹座初演。並木宗輔・並木丈助作。那須与市の息子たちの初陣争いと彼等に対する与一と乳母たちの愛情、建礼門院を守ろうとする弥平兵衛宗清の忠義、その宗清を慕うみたらし、二見の二人の女性の葛藤を中心に描いている。注目すべきは、ここでは屋島合戦の出来事となっていることである。海に弓を落とした義経は、かくも弓を取り上げ（弓流し）、船の軸先に上り、飛驒左衛門経景を射殺す。怒った越中次郎兵衛盛次は早船で義経に寄せ勝負を挑む。

義経透さず小太刀を抜き、「シヤものものし、手並を見せん」と、僅の船をともへに走り、秘術を尽せし早業に、盛次も一期の瀬戸際、郎等諸共汗たらたら、爰を最期と戦ふたり。義経故と盛次に、肝潰させて慰まんと、透間を見て雑兵が首、打落す。はづみにつれ、六艘隔てし味方の舟へ飛越して、「序に盛次、爰まで来れ」と、につこと笑ひ立たる有様、八島の浦にて義経の八艘飛とは是とかや。

義経は早業を用いて、盛次の肝をつぶしてやろうと、隙を見て

雑兵の首を斬り落とす。その弾みで、船六艘を飛び越える大跳躍を行うのである。両端に一艘づつあるので、これで八艘、「八島の戦い」における「八艘飛び」とはこのことであるとされる。他に早い例として『義経千本桜』第四「河連法眼館の段」があげられる。『義経千本桜』でも、八艘飛びは屋島合戦のことだとされている。『義経千本桜』は、延享四年（一七四七）、大坂竹本座初演。並木宗輔が実質的作者かとされる。両者に共通するのは、「並木宗輔」である。まだ推測の域を出ないが、並木宗輔の作品以前に「八艘飛び」が確認できないのであれば、「八艘飛び」は八島の「八」に引っかけた並木宗輔の創作だったと言えるのではないだろうか。

見てきたように『那須与市西海硯』や『義経千本桜』が、義経が八艘飛びをする早い例である。つまり、「八艘飛び」は近世にできた語彙である。近世後期には、義経の飛翔伝説を取り込み、川柳にも多数詠み込まれている。

さて、改めて、「必殺技」を考えてみたい。文芸における「必殺技」とはなんなのだろうか。まさに「八艘飛び」こそが「必殺技」と言えるのではなからうか。ここで「必殺技」とは、「場面転換の妙技」であると規定してみたい。つまり、その行動をおこすと物語の場面が好転していく、その趣向が「必殺技」なのである。判官物において、「笛を吹く」「跳躍する」行為が物語を展開するキーになっている。場面転換を引き起こす行動に名付けが加わり、「必殺技」となったのだ。これは先に見た幸

若舞曲『烏帽子折』にも通じるところがある。

さらに追求が必要だが、「技」に名前を付けるのは日本独特の文化であろうか。『三国志演義』『水滸伝』では武器は登場するものの技はない。日本における「必殺技」、その典型が義経の「八艘飛び」なのだろう。これは、現代のさまざまな作品にもつながってくる。ウルトラマンのスペシウム光線などは、まさにそれである。

七、おわりに

超人義経と伝授する鬼一（鬼の大王）の物語を描く義経兵法取得譚には様々な術や剣技が描かれている。それは同時代に流布した判官物において様々に表現され、「技」の名称としてとりこまれる。芸能や兵法書など当時の流行や古典や故事をもとにした名付けが物語の中でなされる様相が確認できるのである。そして、近世において「八艘飛び」が出現する。八艘飛びは現代の「必殺技」にもつながる趣向なのだ。

ここまで記してきた内容は毎年講義で話しているものである。学生からのコメントとして、「雷斬は『NARUTO』にある」「水車は『鬼滅の刃』に出てくる」と教えられる。個々の漫画の分析はここでは差し控えるが、判官物の展開は、まさに現代につながる「技」の文化史の形成と言えるのではないだろうか。「技」を表現する行為、発想、文化は昔も今も変わらないのだ。

注

- (1) 『判官都話』について、以下の論考を参照した。島津久基『義経伝説と文学』（明治書院、一九三四年）、岡見正雄「白河印地と兵法―『義経記』覚書」（『国語国文』27―11、一九五八年十一月）、梶原正昭「鬼一法眼譚の背景」（日本文学研究大成『義経記・曾我物語』国書刊行会、一九九三年、初出一九七三年）荒木繁「判官物語」幸若舞曲と『義経記』（『幸若舞曲研究』3、三弥井書店、一九八三年）、岩瀬博「幸若舞曲における和歌の性格」（『幸若舞曲研究』4、三弥井書店、一九八六年）、徳田和夫「義経鞍馬山中修行伝説と判官物―「皆鶴」「判官都ばなし」（鬼一法眼）」「御曹子島渡り」―」（『お伽草子研究』三弥井書店、一九八八年）、佐谷眞木人「判官都ばなし」（徳田和夫編『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇二年）。
- (2) 以降、寛文版を用いて分析を行っていく。引用は、『室町時代物語大成』12を用い、文意の通らない箇所など、国立国会図書館蔵本で確認した。引用に際して、私意に漢字を当てた。
- (3) 義経の会「東京大学国文学研究室蔵三冊本『判官都ばなし』翻刻」（立教大学大学院日本文学論叢）8、二〇〇八年八月）、義経の会「東京大学国文学研究室蔵一冊本『判官都ばなし』解題と翻刻」（立教大学大学院日本文学論叢）10、二〇一〇年八月）。
- (4) 山本岳史「國學院大學図書館蔵『判官都ばなし絵巻』について」（『さんこの会』の報告、二〇一五年四月）。
- (5) 『物語絵 奈良絵本と絵巻に見る古人のこころ』（海の見える杜美術館、二〇〇六年）解説。
- (6) 引用は、日本古典文学大系（底本、丹緑絵入十二行木活字版）による。
- (7) 寛文版原文は、「いたをとく／＼とふみならし」とする。
- (8) 『義経記』には、「我身は聞ゆる印地の大将なり。人には一様変りて出立ちけり。褐の直垂に節繩目の腹巻着て、赤銅造りの太刀帯いて、一尺三寸ありける刀に、御免様革にて、表鞘を包みてむずとさし、大長刀の鞘をはづし、杖に突き、法師なれども常に頭を剃らざりければ、おつかみ頭に生ひたるに、出張頭巾ひつかこみ、鬼のごとくに見えける」とある。また、「褐の直垂」「黒糸緘の腹巻」は、巻三、書写山炎上の事の修行者も、「唐櫃一合取て出で、褐の直垂に黒絲威の腹巻着て、九十日剃らぬ頭に、揉烏帽子鉢巻し、石櫛の木を以て削りたる棒の、八角に角を立てて、本を一尺ばかり丸くしたるを引杖にして、高足駄を履いて、御堂の前にぞ出で来る」と描かれ、荒法師の典型的な表現と言える。
- (9) 『義経記』では、ここまでの戦いを描かず、あつさりと「たんかい坊」の首を斬り落としてしまう。「長刀を取直し、返し合せ、御曹司は小太刀にて走り合ひ、散々に打合ひ給ふ。もとよりの事なれば、斬りたてられ、今は叶はじと思ひけん、大長刀取直し、散々に打合ひけるが、少しひるむ所を長刀の柄を打給ふ。長刀からりと投げかけた時、小太刀打振り、走りかゝりて、ちやうど切り給へば、切先頸の上にかゝるとぞ見えしが、首は前にぞ落ちにける」。

(10) 『判官都話』は義経を「東の冠者」と強調する。

(11) 佐伯真一「異能の悪僧達―延慶本『平家物語』橋合戦の読み方―」(『軍記物語と合戦の心性』文学通信、二〇二一年、初出二〇〇三年)。

(12) 延慶本『平家物語』巻四(第二中)「宮南都へ落給事付宇治二テ合戦事」、引用は『延慶本平家物語全注釈』による。

(13) 引用は、新日本古典文学大系『舞の本』による。

(14) 引用は、日本古典文学大系『謡曲集』下による。

(15) 注(11)論文。また、近藤好和「長刀源流試考」(『中世的武具の成立と武士』吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九九五年)にも指摘がある。

(16) 引用は、新日本古典文学大系による。

(17) 『兵法秘術一卷書』は、「張良一卷書」「義経虎の巻」とも呼ばれ、四十二箇条からなる兵法の呪法書。中世後期に流布する。引用は、日本古典偽書叢刊3による。底本は、本文・前田育徳会尊経閣文庫本、別注・彦根城博物館琴堂文庫本。なお、ルビはテキストによる。

(18) 参考、石岡久夫「『一卷書』の系統と伝播」(『日本兵法史』雄山閣、一九七二年)、大谷節子「張良一卷書」伝授譚考「謡曲『鞍馬天狗』の背景」(徳江元正編『室町藝文論攷』三弥井書店、一九九一年)。

(19) 『夫木抄』三十三、水車、宗尊親王「ながめやる宇治の川瀬の水車とこととはこそ君はかけけれ」(『国歌大観』による)。

(20) 香雪美術館蔵、長谷川等伯「柳橋水車図屏風」など。

(21) 引用は、日本思想大系『古代中世芸術論』による。適宜読み下した。なお、ルビはテキストによる。

(22) 島津久基「日を返す話 付魯陽公と陵王」(『羅生門の鬼』東洋文庫、一九七五年)、麻原美子「舞曲の挿入説話」(『幸若舞曲考』新典社、一九八〇年、初出一九七七年)。また他に、小野地健「日招き伝承」考(『神奈川大学人文学会誌』158、二〇〇六年)、阿部泰郎「辰狐と王権―『入鹿』の成立―」(『中世日本の王権神話』名古屋大学出版会、二〇二〇年)を参考にした。

(23) 中原香苗「還城案説話の伝承」(『中世文学』41、一九九六年)。

(24) 蛇足になってしまいが、「日を返す」説話は近世後期に、清盛の物語へと変貌していく。志賀忍の『理斎隨筆』(天保八年・一八三七序)巻三十五に、清盛が日輪を扇で招き返した話が載せられ、挿絵には厳島で招き返した様子が描かれる。島津久基は、西田直養の『笹舎漫筆』に「高倉院厳島御幸記」の「日を返す」説話が入り込んでいることが書かれたことを発見し、清盛伝承との結びつきを興奮気味に語っている(注(22)論文。そしてその媒介を舞臺とする。承安四年(一一七四)、後白河に伴って清盛が厳島を訪れた際のことを記す、「伊都岐島社千僧供養日記」に「陵王」が舞われた記録が残る(『神道大系 厳島』、大知徳子氏示教)。前年に経ヶ島が完成した事を考えると、いろいろと妄想したくなるが、本稿ではこままでとしたい。

(25) 八艘飛びの認識、八艘飛びを巡る先行研究としては、島津久基

「八艘飛伝説」(注(1) 前掲書、島津久基「義経の八艘飛」(注

福を祈りたい。

(22) 前掲書、佐藤謙三・小林弘邦『義経記』(巻四、注七「壇の浦での義経八艘飛伝説」東洋文庫、一九六八年)があげられる。

(26) 引用は、叢書江戸文庫『豊竹座浄瑠璃集』2による。句読点を改めた。

(27) ほかに、『だてもようそめてきざらぎ晴模様染衣更著』(安政五年・一八五八、三世桜田治助作)に「八艘飛の与市」が登場する。

(28) 阿部達二『江戸川柳で読む平家物語』(文春新書、二〇〇〇年)。

*付記、本稿は、二〇一八年十二月、中国広州暨南大学にて行われた国際シンポジウム「中日古代兵学・思想・歴史・文学の総合的アプローチ」において、「判官物における「技」の表現をめぐって——『判官都はなし』を起点に——と題して行われた報告が基になっている。報告に際して、ご意見をいただいた方々に記して感謝申し上げます。

資料の閲覧に際して便宜を図っていただいた、海の見える杜美術館、また、学芸員谷川ゆき氏に深謝申し上げます。

校正の最中に漫画家、水島新司氏の計報に接した。代表作『下カベン』に描かれる明訓高校の唯一の敗戦は、弁慶高校との試合、義経の八艘飛びと武蔵坊の立ち往生によるサヨナラ負けである。まさに義経物の必殺技の趣向、そのままの展開と言える。昭和には義経の物語が生きていたということだろう。この論をなすにあたって、どこかにその発想の影響があったかもしれない。氏の冥

(めぐろ・まさし／県立広島大学准教授)